

大国ファルサスの王が魔女を娶ってから一年。

この話が広まった当初は大陸のあちこちで慄いた人間がほとんどだったものの、一年も経つ頃にはそれも落ち着いて、代わりに様々な話が噂として流れるようになった。それらは「王が妃に出会ったのは子供の頃だった」という本当のものもあれば、「魔女は少女姿のまま永遠に年を取らないらしい」などの流言まである。

だからそんな噂の一つを聞きつけて、ファルサス城を訪れる客たちに、ある変化が現れたのかもしれない。

「——どうでしょう、こちらなどはお妃様によくお似合いになるかと思えます。メンサンでは今、始めたばかりの形で貴族の女性の皆様にも好評です」

人型に着せられたドレスは、派手な赤でスカート部が大きく広がっているものだ。西の国から来た豪商との面会の席で、オスカーは表情を消してそれを見る。

「またか……」という言葉はかろうじてのみこんだ。

「ちょっと言わせてもらっていいか？」

オスカーがそんなことを口にしたのは執務が終わった夜、妃しかいない私室においてだ。長椅子を独占して本を読んでいたティナーシャは「はい、どうぞ」と適当な相槌を打つ。今日の彼女は腕と背中、腿半ばから下が露出する白いドレスを着ている。オスカーの趣味で作られたもので「私室でだけ着てくれ」と言われる類の服だ。

「俺は確かにお前に色々服を着させるのが趣味だが」

「貴方の私財の使い道、これだけですもんね」

「それは、俺が服を選ぶところから始まっているんだ。どんな生地でどんな形がお前に似合うかとか、どういう場所に合うかとか、それを考えて、実際に着せてみるまでがひとつなぎなんだ。分かるか？」

「言いたいことは分からなくもないです。共感できるかと言ったらできないんですが」

「企画構想段階も楽しみなんだ」

「私の服の話なんですか、それ」

ティナーシャが半ば聞き流していることは、読んでいる本から顔を上げないことで確実だ。オスカーは長椅子に歩み寄ると妻の体を抱き上げて自分が椅子に座る。

夫の膝上に抱えられる形になった魔女は、呆れ顔で遙か年下の王を見上げた。

「で？ 結局何が言いたいんです？」

「なんで他の男がお前に選んできた服を、俺が受け取らないといけないんだ」

「あー、理解しました」

要するに彼は、最近王の機嫌伺いに来る客が、妻にドレスの贈り物をすることを不満に思っているのだろう。

正確にはそれは「王に対しての土産物」だ。大方彼らは、オスカーが仕立て屋に何着も王妃のドレスを発注したり、街でふらりと彼女の服を買っていることを聞きつけて、「それなら服を贈れば喜ばれるだろう」と踏んだのだろう。

けれどオスカーとしては「選ぶのも楽しみ」なので、肝心の選ぶ部分を奪われていると感じる。現にそうやってもらった服は「別に着なくていいぞ」と言われてティナーシャに渡されるので、魔女も自室の衣裳部屋に入れ

たきりだ。そもそも彼女は魔法を着ていたい人間なので、ドレスを着ていることがあるのは単に夫の趣味だ。

オスカーは妻の小柄な体を抱えたまま力説する。

「渡されるだけならまだいいんだ。『あの方ならきつとこれがお似合いになると思えます』とか、おかしくないか？ それを決めるのは俺じゃないのか？」

「私だと思います。ただ単に、私にある権利を貴方に委譲してらんです」

「でもさすがに大人げないからそんなことは言えない」

「よく我慢しましたね。えらいえらい」

妻相手に愚痴を吐いて鬱憤晴らしをしているオスカーは、ティナーシャに頭を撫でられて微笑した。

「まあ別に言っただけだ。これからも適当に流すさ」

「貴方は欲しがりそうなものが他にないから、みんなが贈り物に困るんですよ。もっともらっても困らないものを噂にでも流しとくといいです」

「特にないんだが」

「もしくは私が直接言ってもいいですが。——私は、私の王以外の着せ替え人形ではないのだと」

美貌の魔女は艶やかに微笑む。その目は人の命を簡単に奪い去れる強者のものだ。彼女にそんなことを言われた人間は、震えて夜眠れなくなるだろう。だがそれはオスカーの望むところではない。

「何か別のを考えるさ。女官が喜びそうなものならたくさん来ても困らないだろう」

「お任せします」

すらりと白い両足を夫の腕の上に預けて、ティナーシャは微笑む。その笑顔にオスカーは一日の疲れが取れる気がして、オスカーは満足そうに自分の妃に口付けた。